教職支援室便り（８月号）

令和５年　８月　１０日　（木）
文責：教職支援室　曽我文敏
☎０９８５－２０－４８０８

教員採用選考試験（第一次試験）終わる

第一次試験が終わりました。学生の皆さんは、それぞれ緊張感の中で、試験に臨んだことでしょう。しかし、試験に対しては、これまで、積極的に筆記試験等の対策に取り組んできたことが、心の拠り所になったと思います。昨年１０月から本年６月下旬にかけて、５０コマ以上の特別講座に取り組むとともに、自宅等での自主学習に励んできたことは、何よりの財産です。試験結果が気になるとは思いますが、「やれることは、すべてやった。」という自信を大切にしてほしいです。

次に、学生の皆さんの、一次試験終了直後の思いを紹介します。

＜一次試験を受験しての感想・二次試験への思い＞

教員採用試験の一次試験を終えての私の感想は、まず、特別講座で学んだことが、実際にそのまま試験問題にも登場し、正解することができたと考えられるため、特別講座を受講し、数をこなし、継続してきた効果を感じることができた。それらに加えて、講座が非常に意味のあるものであると感じることができ、かつ、問題を正解することができたことにつながった事に関しても、有り難い気持ちであふれている。また、講座で学んでいないことも試験問題に登場したが、他の法律や答申などで触れた表現や法律の文言などを手掛かりとし、問題を解くことにつながった事もあったため、講座の全てがつながっているような印象を受けた。最後に、全てが終わったわけではないので、自身の目標を達成できるように、今後も努力していきたいと考えている。

これまで特別講座を受験して、多くの教育法規等について学んできましたが、授業で学んだことを、自分の経験と結びつけて考えられるようになったところが、１番良いところだと思います。

これから２次試験に向けて取り組んでいきますが、私は面接と模擬授業があり、今のところ、どちらとも苦手意識があり不安な部分がありますが、これからの特別講座を通して苦手意識を克服し、合格を取れるように一生懸命頑張りたいと思います。

教員採用試験を受験し、まず思ったことは「教職特別講座を今まで取り組んできて本当によかった」ということです。試験問題を解く際に講座で出てきた内容は解きやすく、そして講座で扱われなかった問題を解く際も、今までに配布された資料の内容や語句を思い出し、考えながら解くことができました。昨年の１０月から今まで教職特別講座の問題を毎週解くことはとても大変でしたが、努力してきたことは自信につながりました。

まだまだ先だと思っていた１次試験が終わりました。今の率直な感想としては、不安が大きいです。出題内容は教育時事の問題が多くて、中には初めて聞くような答申もあって勉強不足を実感しました。ただ、自分の手応えとしては、今の自分の実力は出し切れた状態なのかなとも思います。特別講座を重ねていく中で、見覚えのある文章が増え、時間をかけずに解けることのできる問題が増えていったからです。今まで悩んでいた問題、わからなかった問題が解けるようになった時はとても喜びを感じ、楽しさすら感じました。そして、久しぶりに勉強することの楽しさを感じることもできたし、１つの目標に向かって頑張ることができたのは、自分にとっての糧になったと思います。今は合格していることを祈るのみですが、もしだめだったとしても教員になることの難しさを実感できる機会でもあったし、もっともっと高みを目指していかなければいけないんだと再理解できる機会になったと思います。これから２次試験の対策においても、気持ちを切り替えて取り組んでいきたいと思います。

一次試験が終わり、二次試験に向けて対策が始まるタイミングで正直不安が大きいです。今までは、筆記での回答を想定した勉強を続けてきましたが、それらを二次面接において自分の言葉で考え、表現できるのか自信がありません。二次までおよそ１か月半あるので練習あるのみだと思いますが、教職教養の内容や自分の考える教育とは、理想の教師とは何かについて、今一度考えを整理していこうと思います。また模擬授業に関しても、教育実習前の受験となり経験がないままでの挑戦になるので先生方のお力を借りながら、納得のいく模擬授業を作り上げられるようにしていきたいです。

そして、現在、二次試験対策の特別講座も、第４週に入りました。学生の皆さんが、週計画のプログラムを立て、週ごとの課題を設定して、演習が行われています。私も、学生の皆さんと貴重な時間を共有しています。学生の皆さんの「やれることは、すべてやりたい。」という思いを受け、私自身も、「やれるだけの支援は、すべてやりたい。」という思いです。次頁には、現在の夏季教職特別講座の一部を紹介しています。

夏季教職特別講座：演習

面接演習

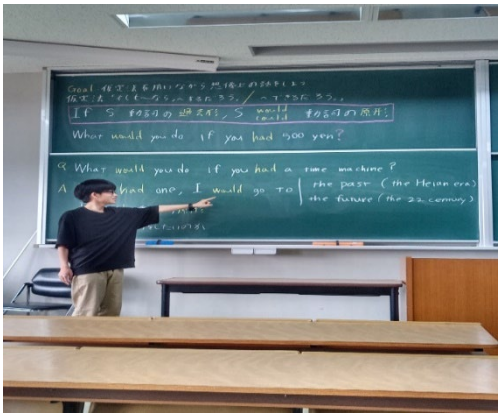
＜個人面接演習の様子＞

＜集団面接演習の様子＞

面接のオリエンテーションでは、２つの人物評価の視点（①教職への情熱、人柄、適性等、②教職教養に関する知識・理解）について、試問例を示しながら解説しました。全国的な傾向としては、教職への情熱、人柄、適性等についての試問（通常試問）が、多く行われています。しかし、教職教養に関する知識・理解（教職教養試問）を取り入れている自治体もあることから、受験自治体によっては、教職教養試問も交えて演習しています。また、本年度は、試問数４１５で構成される試問集を作成し、演習に役立てています。

面接演習の始めは、面接に慣れるために集団面接の形態で行います。そして、徐々に個人面接の形態とし、私の方で受験自治体に応じた試問をしながら、返答内容への助言をしています。この演習を重ねる中で、学生の皆さんの面接力が向上していきます。面接力とは、「自分の考えを率直に述べ、教師になりたい思いを、初めて出会う人に（面接者）に、言葉にのせて伝える力」です。この面接演習についても、多くの時間を要しますが、時間の経つのも忘れるほどの取組が見られます。そこには、面接力の向上とともに、教師力を高めている学生の皆さんの姿があります。

模擬授業演習



＜中学校模擬授業演習の様子＞

模擬授業についても、実践的な演習を行っています。本年度も、模擬授業の目的、評価の視点、評価項目、面接者の試問例、留意事項等についての、オリエンテーションからスタートしました。

本年度の皆さんは、小学校外国語科、中学校・高等学校の英語科に関する模擬授業を受験することから、本学の英語科の先生方に指導助言をお願いしています。

学生の皆さんには、日を追うごとに、模擬授業力向上への意欲の高まりが見られ、力を付けているのがわかります。

卒業生からの便り

今学校は、夏季休業に入っています。今年３月に卒業し、学校現場に赴任した卒業生は、ほっとしていることと思います。毎日の授業、生徒指導、学校行事など、多忙な毎日を過ごしたことでしょう。やはり教職１年目は、１年の見通しがもてないことから、精神的にも大変だと思います。しかし、そんな中にも、子どもたちの言葉や笑顔などに励まされることも多くあったと推察します。何かと教職については、ネガティブな面が言われがちですが、教職のやりがいは学校現場の先生方が、一番理解されていると考えます。

教職支援室便りでは、適時「卒業生からの便り」を掲載していますが、今回は、７月末に届いた卒業生からの便りを紹介します。

お久しぶりです。暑くなってきましたが、元気に過ごされていますか。

私は４月から中学１年生の担任となり、忙しい毎日を送っていますが、環境に恵まれ、周りの先生方に沢山助けていただきながらなんとか毎日を過ごしています。本当はもう少し早くご連絡したかったのですが、慣れない仕事に追われ気づけば終業式も終えていました。

教職の現場は私が想像していたよりもはるかに大変で、１日１日を過ごすのに必死です。働きはじめてもう４か月が経ちますが、生徒と向き合うことは相当な根気が必要で、時に心が折れてしまいそうなこともありました。ただ、それ以上に生徒が慕ってきてくれること、楽しそうに活動している様子が私の力になっているな、と日々実感しています。

そして、授業、保護者会、三者懇談、教育相談、家庭訪問、といった様々なことを実際にしましたが、大学で先生に教えていただいたこと、特別講座でみんなで話し合ったことがとても活きているなと実感しています。しっかり勉強したり話し合ったりしていてよかったなと、本当に思っています！

２学期には体育祭などの行事も沢山あります。まだ想像もつかないことが沢山あると思いますが、周りの先生方から沢山学び、生徒と一緒に少しずつ成長していけるように、今の私にできることを精一杯やっていきたいと思います。

曽我先生も特別講座や大学の授業等でお忙しくされていることと思います。きっと昨年までと同じように、熱心に丁寧に学生に向き合っておられると思いますが、先生自身の体調もお大事にしてくださいね。また近々ご報告させてください。

道徳の教科化に思う！（シリーズ７５）

平成２９年の６月号から、「道徳の教科化に思う」をテーマに、道徳授業の本質的な在り方等について連載しています。今回は、「道徳科における問題解決的な学習を考える」をテーマに、その４として「『問題解決的な学習』における発問の課題」について掲載します。

◇「問題解決的な学習」における発問の課題

「特別の教科　道徳」として学習指導要領が公表されて以来、これまで、道徳科における「問題解決的な学習」に関しての実践資料が、散見されるようになったが、それらの中で、記憶に残る発問パターンがある。

① 主人公のどんな点が問題なのか。何に困っているか。何に悩んでいるか。

② あなたならどうするか。その理由は何か。

③ 解決するためには、どうしたらよいのか。

④ ○○することは、相手のためになるのか。逆の立場であったらどう思うか。
そうすることは、なぜいけないのか。
このままであったら、どのようなことが予想されるか。

⑤ このようなとき、どうすべきなのか。解決するためには、何が大切なのか。
（例・思いやり）はなぜ大切なのか。

モラルジレンマ学習的な発問パターンであると考える。特に、「あなたならどうするか。」などの発問については留意するところであり、その課題を以下に述べることにする。

① 「自分だったらどうするか」を発問した場合、子どもたちは道徳的価値を、真に自分との関わりの中で考えることができるのか。
② 「自分だったらどうするか」を問われたとき、子どもたちの心理はどうなのか。
③ 「このようなとき、どうすべきなのか」などの発問は、分かりきったことを言わせることにつながるのではないか。
④ 正論を主張する子どもたちは、何を学ぶのか。
⑤ 反正論を主張する子どもたちは、学習の成就感（納得感）を味わうことができるのか。
⑥ 授業者は、授業ストーリーをもつことができるのか。「ねらい」に迫れないままに、授業が終わることがあるのではないか。
⑦ 読み物教材を活用する場合、特に問題場面（意見の対立が予想される場面）が強調されることになるが、教材内容全体のよさは生かされるのか。授業者は、読み物教材の登場人物の思いを考えることなく学習を進めていくことで、「ねらい」に迫ることができるのか。
⑧ 教師は子どもたちとともに、道徳的価値を考えているのか。教師の目線はどこにあるのか。このような授業が主体となった場合、授業力、教師力は向上していくのか。